

## ア・ペ・リ 『社会主義から共産主義への漸次的移行について』

А. П. Липин: О постепенном переходе от социализма к коммунизму. Москва 1946 г. стр. 24

大崎平八郎

はしがき

社会主義から共産主義への漸時的移行の問題がソ同盟において、はじめて提起されたのは、一九三九年の第十八回黨大會であつた。

ソ同盟は社会主義工業化と農業集團化によつて、一九三五—六年ごろ一應社会主義建設を完了した。第十八回黨大會はこのことを確認すると同時に、「社会主義の完成と社会主義から共産主義への漸次的移行の段階に入ることを決議した。このとき以来社会主義から共産主義への漸次的移行の問題は、ソ同盟において具體的日程にのぼるにいたつた。

今次世界大戦によつて、その具體化は一時中断されたが、戦後の新しい五カ年計畫によつて戦争被害が急速に克服され、ソ同盟は社会主義から共産主義への移行に向つて新しい前進をはじめた。

五カ年計畫の四カ年遂行が見透されるにいたり、戦後第二次の五カ年計畫が今年度から開始されるとみられる状況のもとにおいて、社会主義から共産主義への漸次的移行の問題は理論的にも實踐的にも重要性をもつにいたつた。

このような状況を反映して、最近のソヴェト論壇は移行期における工業、農業、商業、技術、教育、文化の諸問題を全面的にとりあげている。またこれまで社会主義經濟學の中心テーマからやゝそれていた『社会主義から共産主義への移行』に関する理論は、一方においては移行期における實踐活動を規定し、方向づける理論的武器として、他方においては、完成に近づきつつある社会主義經濟學の重要な構成テーマとして、きわめて重要な意義をもち、すでに注目すべきすぐれたいくつかの論文が發表されている(註)。

ア・ペ・リヤーピンの論文『社会主義から共産主義への漸次的移行について』は邦譯して六十枚足らずのものであるが、移行期の經濟理論をとりあつた注目すべき論文であり、この種の理論問題が紹介されていないので、こゝでやゝ忠實な紹介をするのも意味のないことではないであらう。

(註) こゝで紹介するものは他に、同じ著者の『社会主義

から共産主義への漸次的移行について』(『ボリシエツイ

ク』誌一九四六年十一月十二號)(О постепенном переходе от социализма к коммунизму. «Большевик» No. 11/12, 1946 г., стр. 40-53.) А. П. Липин

『社會主義と共產主義は共產主義社會の二つの段階である』  
 『モスクワ大學時報』一九四七年十一月號 (A. П. Свири-  
 дов: Социализм и коммунизм — две фазы коммуни-  
 стического общества. Вестник Московского универ-  
 ситета) No. 11, 1947 г., стр. 121-134.) マ・ス・メタマ  
 ヲルツォフ『社會主義から共產主義への移行の若干の合法  
 則性について』(『哲學の諸問題』誌一九四七年二月號)(О  
 некоторых закономерностях перехода от социализма  
 к коммунизму. Вопросы философии) No. 2, 1947 г.,  
 стр. 28-54.) ヲホ・マ・メチヤホ、リヤン『社會主義から  
 共產主義への移行について』(『ボロンガンダ・イ・アギタ  
 ーソフ』誌一九四八年六月號)(Ш. А. Стелпан: О пере-  
 ходе от социализма к коммунизму. «Пропаганда и А-  
 гитация» No. 6, 1948 г., стр. 7-20.) なども。

リヤーピンはまず序説において、社會主義から共產主義への  
 移行期に直面するソ同盟の現段階の意義を明らかにする。かれ  
 はここでスターリンが提起した國內的側面と對外的側面をあげ  
 ている。國內的側面とは、社會主義工業化、農業集團化および  
 三次にわたる五カ年計畫によつて社會主義社會が基本的に建設  
 され、共產主義社會建設のための一切の條件と可能性が存在す  
 るに至つたということであり、對外的側面とは、今次世界大戰

の結果、ソ同盟の國際的權威が高まり、戦後における平和的な  
 社會主義建設のための有利な諸條件が生じたが、他方資本主義  
 世界が存在する限り、新たな戦争の企圖によつて共產主義への  
 移行事業が脅威をうける可能性が十分に存在するということだ  
 ある。このような世界史的現段階においてソ同盟は一國におけ  
 る共產主義社會の建設に巨歩をふみだしているとリヤーピンは  
 序説を結んでいる。

ついで本論にいきり、かれは共產主義社會の科學的特徴づけ  
 がマルクスとエンゲルスの獨創的天才によつて、はじめて行わ  
 れ、その後レーニンとスターリンによつて、新しい歴史の條  
 件のもとで發展されたことを強調したのち、マルクス・エンゲ  
 ルスの理論は「ソ同盟において史上はじめて現實となつた」  
 (四ページ)といふ。

それでは社會主義から共產主義への移行に関する理論は、ソ  
 同盟の社會主義建設の實踐過程において、いかに發展し、體系  
 づけられてきたであろうか。

リヤーピンはまず、『社會主義から共產主義への漸次的移行』  
 という場合、社會主義と共產主義とはなにか。そのあいだの本  
 質的異同性を問題する。

マルクスとエンゲルスの古典は、社會主義と共產主義とのあ  
 いだには、基本的差異が存在しないこと、共產主義社會はその

發展において二つの段階——社會主義と共產主義——を経ることを教えている。マルクスとエンゲルスがいう社會主義および共產主義は、生産手段の私的所有にかわつて、生産手段の社會的所有が、經濟の盲目的自然生長性にかわつて、國民經濟の單一計畫化が支配し、人間による人間の搾取、生産の無政府性、恐慌、失業が存在しない社會である。社會主義と共產主義との差異は、「二つの異なる社會的經濟的構成ではなくて、同一の共產主義社會の二つの異なる發展段階にすぎない」(五ページのマルクスは『ゴータ綱領批判』のなかで、前者を共產主義の第一段階またわ低度の段階と呼び、後者を共產主義の第二段階またわ高度の段階と呼んでいる。しかしながらマルクスの時代には、社會主義と共產主義との區別は具體的には問題とならなかつた。だから『資本論』のなかで、マルクスは社會主義、すなわち共產主義の第一段階を、ある箇所では共產主義と書き、ある箇所では、社會主義と書いて、兩者のあいだに明確な區別を設けなかつた。しかしながらソ同盟におけるそのこの歴史的發展は、過渡期としての社會主義社會、マルクスのいう共產主義の第一段階がかなりながい時間的幅をもつことを明らかにし、ソ同盟の社會主義建設の實踐過程は、社會主義と共產主義とを區別する一連の明確な特徴を與えた。リヤーピンはこれを次のごとく特徴づけている。

「社會主義と共產主義のこの共通な基礎は共產主義社會の發展の程度と段階だけがそれらを區別する可能性をあたえ

書評

る。(傍點筆者)……社會主義においては、生産諸力はまだ一切の消費對象の潤澤を保障するほどの發展段階に達していない。労働は人間のもつとも本源的な生活的欲求となつていない。その結果社會は労働の尺度と欲望の尺度にたいしてもつとも嚴格な統制を實施しなければならぬ。消費對象の分配は『能力に應じて各人から、労働に應じて各人へ』という原則にしたがつて行われる。社會的所有は一つの形態、國家的(全國民的)所有とホルホーズの『協同組合的所有のかたちで存在する。これらの二つの所有形態は労働者階級と農民のあいだの階級的差異のなかにも現われる。經濟と人間の意識のなかに資本主義の殘滓がのこつている。都市と農村、肉體労働と精神労働のあいだの對立はまだ完全には清算されていない。労働の古い社會的な分業の殘滓がのこつている。共產主義の高度の段階においては、生産諸力は豊かになり、生産物と消費對象とは完全に潤澤になる。労働は人間の本源的な生活的欲求となる。消費對象の分配は『能力に應じて各人から、欲望に應じて各人へ』の原則にもとずいて行われる。ここでは單一の社會的所有形態——生産手段の共產主義的所有が存在する。それとともに階級的差異の殘滓と人間の意識における資本主義の殘滓が完全に克服される。都市と農村、肉體労働と精神労働のあいだの對立は最終的に根絶され、労働の古い社會的分業の殘滓は消滅する」(五—六ページ)。

では社會主義から共產主義への移行はどのような形態をと

つて行われるであろうか。

周知のように、歴史が資本主義から社会主義へ移行する場合  
には、一つの生産方法の他の生産方法による交替、すなわち資  
本主義的生产方法から社会主義的生产方法への轉換であつた。  
この轉換は生産方法の變革をとまなうところの社会主義革命に  
よつてのみ可能である。これにたいして、社会主義から共産主  
義への移行はそれとは全く異なる形態をとつて行われることを  
指摘して、リヤーピンは次のようにいう。「社会主義から共産  
主義への移行は一つの社会的經濟的構成から他の社会的經濟的  
構成への移行ではない。それは生産手段の社会的所有にもとず  
く同一の社会的經濟的構成内部において遂行される。……社会  
主義制度が全國民經濟において無限に支配している條件のもと  
では、共産主義社会の最高の第二段階は第一の段階——社会  
主義から成長し、發展するであろう。そのためには社会主義か  
ら共産主義への移行は漸次的發展によつて實現されるであろ  
う」(六ページ)。こゝで漸次的發展といふのは、けつしてその  
發展がのろいテムポで行われることを意味しない。むしろその  
反對であつて、社会主義から共産主義への移行は、「生産諸力  
の急速な發展と國民經濟の急速な成長と人民の物質的文化的水  
準の未曾有の高揚とによつて特徴づけられる」といい、この移  
行過程にはまた飛躍も存在しうるとして、かれは社会主義的分  
配原則から共産主義的分配原則への移行の場合および移行期に  
おける科學と技術の顯著な進歩、人間による自然の征服をあげ

ている。

つづいて、リヤーピンは社会主義から共産主義への移行期に  
おける社会的發展は闘争なしに、なんらの努力なしに行われる  
のではないことを強調して、『無階級社会の到来を期待して、  
武器をたたくで横臥することができ』と考へている人々を嘲  
笑したスターリンの言葉を引用したのち、次のようにいう。  
「共産主義への移行は巨大な未曾有の生産諸力の發展を意味す  
る。新しい社会建設のためには、非常な努力と積極性を要求  
する。それと同時に資本主義的殘滓にたいする緊張した闘争を  
つづけなければならない」(七ページ)。

ついで、リヤーピンは、『社会主義の建設の完成と共産主義  
への漸次的移行』ということとは、まず社会主義の建設が完全  
に終了してから、そののちにはじめて共産主義への移行が開始さ  
れるのであろうかという問題を提起する。かれは社会主義の建  
設の完成と共産主義への漸次的移行が機械的に段階をなしてつ  
づくのではなくて、単一の過程であることを指摘して、次のよ  
うに述べている。

「それは(社会主義から共産主義への漸次的移行)相つぐ  
二つの過程ではなくて、単一の過程である。社会主義的生产  
方法の「その發展と強化とともに、社会主義社会の建設の  
完成とともに、共産主義への漸次的移行は遂行されるであろ  
う」(八ページ)。

すなわち社会主義から共産主義への移行は社会主義の基礎お

よび原則、社會主義的生產諸關係の全面的強化と發展によつて、具體的には、社會主義的所有形態の強化と發展とを通じて、單一の共產主義的所有形態への移行が行われ、勞働による社會主義的分配原則の強化と發展とを通じて、欲望による共產主義的分配原則への移行が實現される。と指摘している。

### 三

第三節では、リヤビンは、社會主義から共產主義への漸次的移行期にあるソ同盟國民經濟の生産力がいつたどの程度に達したときに、社會主義から共產主義への移行が實現されるのであろうかというより具體的な問題に觸れている。

こゝではリヤビンのいつているところを簡単に要約するにとどめよう。

リヤビンは、「主要資本主義諸國を經濟的に追い越す場合のみ、われわれは、わが國が完全に消費物資が豊富になり、共產主義の第一段階から第二段階へ移行することができるであろう」という第十八回黨大會におけるスターリンの言葉を引用したのち、人口一人あたりの工業生産高が先進資本主義諸國に追つき、追越すといういわゆる基本的經濟課題と、戦後の新しい條件のもとでは、アメリカの生産力に追つき、追ひ越すために、銑鐵の年生産高を五千萬トン、鋼鐵一六千萬トン、石炭一五億トン、石油一六千萬トンが必要であり、そのためには、少くとも約三回ほどの五カ年計畫を必要とするであろうという

一九四六年二月九日の選舉演説におけるスターリンの言明とを指摘し、社會主義から共產主義への移行にあつて、戦後の新しい五カ年計畫のもつ歴史的意義を強調して、その具體的な目標數字をあげて説明している。

### 四

社會主義から共產主義への漸次的移行は、資本主義から社會主義へ移行する場合のように、革命的方法によらず、漸次的移行の形態をとつて、社會主義的生產諸關係の全面的強化と發展とによつて行われることを第二節で明確にしたが、ソ同盟の社會主義經濟の現段階において、共產主義の高度の段階から社會主義が區別される諸特徴——二つの社會主義的所有形態、階級的差異、社會主義的分配原則、都市と農村との對立、肉體勞働と精神勞働との對立——が、具體的にはどのような過程を通じて、共產主義の段階へ移行するかを明らかにする。

リヤビンはまず第一に、二つの社會主義的所有形態がいかなる過程を通じて、單一の共產主義的所有へ移行するかの問題にすむ。社會主義のもとでは、社會主義的所有形態には、國家的所有とホルホーズ的協同組合的所有の二つの形態が存在する。この二つの所有形態のなかに、生産手段にたいする勞働者階級と農民との關係が反映されているわけである。これらの二つの所有形態は社會主義的所有という意味では、同一形態であるが、生産手段の社會化の程度に差異が存在する。社會主義

から共産主義への移行は、社會主義的所有形態から共産主義的所有形態へ、すなわち二つの所有形態から單一的所有形態へ移行することであり、それは「社會主義的所有のより高度の形態としての國家的所有の指導的役割の強化による社會的所有の二つの形態の全面的發展の強化にもとずいて行われる。また協同組合的「ホルホーズ」的所有形態は、ホルホーズの社會化經營の強化によつて發展するであらう」(一四ページ)。といひ、第七回大會におけるスターリンの次の言葉を引用している。

「將來の農業コンムーナは島において、アルテリ農場において穀物が、家畜が、家禽が、野菜およびその他の生産物が豊富になつたとき、アルテリにおいて機械化された洗濯機械、近代的食堂、パン焼工場等々が創設されたとき、ホルホーズ員が農場から肉や牛乳をうけとることが自分の牝牛や家畜を飼うよりも有利であることを認めたと、また食堂で食事し、パンをパン工場からうけとり、洗濯されたシャツを公共洗濯場からうけとる方が自分でするより有利であると認めたとときに發生する。將來のコンムーナは進んだ技術とより進歩したアルテリと生産物の豊富化にもとずいて發生する」(スターリン『レーニン主義の諸問題』四六九ページ)。

社會主義のもとでは、二つの所有形態に關連して、労働者階級と農民階級との階級的差異が存続する。これらの階級的差異は、二つの所有形態から單一の共産主義的所有形態へ移行するとともに、完全に消滅するであらう。そのために、『搾取者、

地主、資本家を打倒するだけでなく、かれらの所有を廢絶しなければならぬ。生産手段にたいするあらゆる私的所有を廢止しなければならぬし、都市と農村とのあいだの差異、および肉體労働者と精神労働者との差異を清算しなければならぬ」(レーニン全集第二十四卷、三三七ページ)。

社會主義を共産主義から區別するもう一つの基本的差異は、社會的生產物の分配方法における差異である。社會主義的分配原則は「各人から能力に應じて、各人へ労働に應じて」であり、共産主義的分配原則は「各人から能力に應じて、各人へ欲望に應じて」である。これらの二つの分配原則は社會主義社會においては、まだ生産力が完全に社會全構成員の欲望を充すことができる段階にまで達していないところから生ずる差異である。

社會主義から共産主義への移行は、すなわち労働に應ずる社會主義的分配原則から欲望に應ずる共産主義的分配原則への移行は、「労働に應ずる社會主義的分配原則の一その強化によつて行われる」(一七七ページ)。このために累進的出來高拂制、プレミアム制、ホルホーズにおける集團的出來高拂制、收穫率の向上にたいする追加的支拂の廣泛な適用が行われ、貨幣および價值法則が利用されると結論する。

社會主義から共産主義への移行によつて、都市と農村との對立と肉體労働と精神労働との對立もまた消滅する運命を擔つてゐる。

社會主義社會では、社會主義的工業化と農業集團化によつ

て、都市と農村との対立は基本的には解消されたが、なお依然として残っている。その完全な清算は共産主義社会においてはじめて實現される。その基本的條件をなすものは、農村におけるコルホーズ制度の勝利であり、具體的には農業における全面的機械化と電化とによつて、農業労働が工業労働の一變種に轉化し、工業と農業との區別がなくなるときに、都市と農村との対立は最終的に消滅するといふ。

社会主義社会において存続するもう一つの対立は、精神労働と肉體労働との対立である。社会主義革命によつて労働者と農民とは搾取から解放され、新しい先進的技術が創造され、それをマスターした優秀な基幹部員が増大しつつあるが、労働の古い分業の残滓はなお存続し、精神労働と肉體労働とのあいだの対立は完全には清算されていない。これらのあいだの対立を清算するためには、社会主義生産の労働者の教育的文化的水準の向上と、労働者および農民の技術的文化的の高揚が必要である。つづいてリャーピンは精神労働と肉體労働との対立の解消過程におけるスターノフ運動の意義を強調して、「社会主義から共産主義への移行にとつて必要な大衆の技術的文化的の高揚の端緒である」と結んでいる。

最後にリャーピンは、移行期における國家の役割について言及している。

リャーピンは、ソヴェト國家は社会主義社会建設の主要な、決定的な道具である」と規定し、ソヴェト國家が社会主義建設

において果してきた實踐的役割を歴史的に述べたのち、「ソヴェト國家は社会主義のすべての段階にわたつて必要である。それは資本主義的包圍が存続するかぎり、完全な共産主義においても、必要である」（傍點筆者）と斷定する。

以上が簡單ではあるが、リャーピンの論文の紹介である。この論文には、論旨の展開に不十分な點が、若干見られないでもないが、移行期におけるいくたの重要な理論問題が解明されている點で注目すべき論文である。なおこの論文は戦後の五カ年計畫が開始されたばかりの一九四六年はじめに、啓蒙的な目的をもつて執筆されたものであることを附記しておく。そのこの現實の急速な展開とともに、社会主義から共産主義への移行に關する理論はさらに一そのの深化をとげたであろうことは想像にかたくないが、そのこの新しい展開については別の機會に譲らう。（一九五〇・一・一四）